京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **35** (2016), 35–57

イロカノ語のイデオフォン

山本 恭裕

【要旨】本研究はイロカノ語（オーストロネシア語族、西マラヨ・ポリネシア語派）におけるイデオフォンの言語学的特徴を捉えることを目的とする。類型論的な観点からイデオフォンの形式と意味の両方を記述し、当該範疇が一般語彙または他言語と比較してどのような共通性や差異を持つのかを分析する。イロカノ語のイデオフォンは形態的及び音韻的に有標な語根である。統語的には、イデオフォンは述部あるいは名詞句の主要部として実現し、他の品詞範疇と複数の特徴を共有している。その一方で、イデオフォンは他品詞とは異なる性質も持ち合わせる。これらの事実から、イデオフォンは他の品詞と部分的な共通点を持つ単独の範疇であると結論づける。また、イロカノ語のイデオフォンにおいては、通言語的に頻繁に指摘されている高い統語的独立性や表出性が観察されず、文法体系に高い度合いで統合されていることを示す。さらに本研究は、イデオフォンの機能的な側面に着目し、描写性や証拠性という点ついて議論する。*

【キーワード】オーストロネシア、イロカノ語、イデオフォン、言語類型論

1. はじめに

イロカノ語 (Ilokano/Ilocano) はフィリピンのルソン島北部に位置するイロコス・ノルテ州、イロコス・スール州、ラ・ウニオン州を中心に、周辺のカガヤン州やパンガシナン州などにも分布するオーストロネシア語族、西マラヨ・ポリネシア語派の言語である。

本研究で扱うイデオフォン（擬音語・擬態語、オノマトペ）は、意味的・形式的・記号論的に有標な語を指す (Dingemanse 2011)。こうした語は特殊な音配列や独特な文法に加え、人間の感覚に関わる意味などを特徴とし (Diffloth 1972; Childs 1994)、形式と意味の類像性なども報告されてきた (Hamano 1998; Tufvesson 2011)。近年、こうした特徴を持つ語がさまざまな地域の言語で発見されており、Ideophones（主にアフリカ）や Expressives（東南アジア大陸部及び南アジア）、Mimetics（日本）などさまざまな用語で呼ばれている。

* 本研究は科学研究費補助金#15H03206（代表: 松本曜）からの支援を受けている。

しかしフィリピン言語学においては、イデオフォンに関わる研究は Rubino (2001) や Blust (2003) など非常に限られた数しか存在しない。また、それらの先行研究も象徴素 (phonaestheme) や形態論など限定的な範囲しか扱っていない。従って本研究では、イロカノ語のイデオフォンの意味と文法の両面の記述・分析を行い、その全体像の把握と、類型論的な特徴付けを目指す。具体的には以下の問題に取り組む：

I. イロカノ語において、イデオフォンは他の語類とどのような点において異なるのか、または共通する特徴を持つのか
II. イデオフォンが単独の品詞クラスを形成するか、もしくは何らかの品詞の下位範疇と見なせるのか
III. イデオフォンが表す意味領域はどのようなものか。また、イデオフォンはイロカノ語においてどのような機能を担っているのか。
IV. イロカノ語のイデオフォンが有する特徴は、他の言語において報告されている傾向と一致するのか

2. イロカノ語の概略

イロカノ語は、系統的に北部フィリピンのコルディリェラ言語グループに分類され、Reid (1989) はイロカノ語をこのグループの単独のブランチに位置づけている（図 1 中央部の ‘Ilk’ ）。

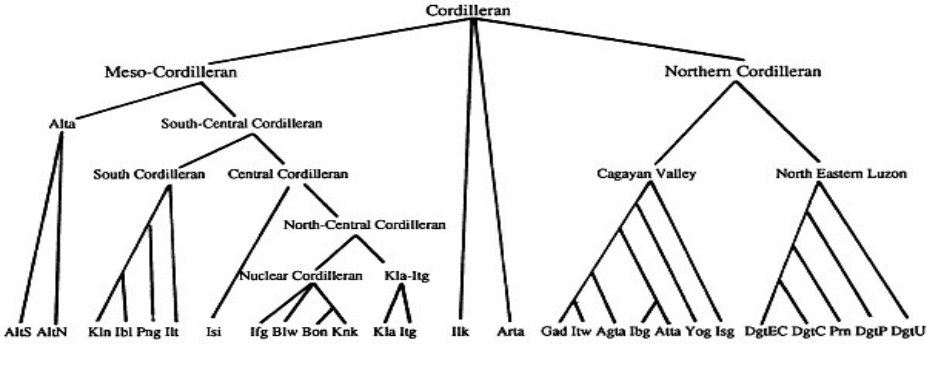

図 1. コルディリエラ言語のサブグルーピング (Reid 1989)

イロカノ語の話者数は約 700 万程度とされており、これはタガログ語とセブアノ語に次いでフィリピンで三番目の数である。イロカノ人の元々の分布地域は、現在イロコス・ノルテ州、イロコス・スール州、ラ・ウニオン州が位置するルソン島北部の西岸

沿いであった。しかし、アブラ州やベンゲット州、カガヤン州、パンガシナン州などの周辺地域への移住によって、イロカノ語は北部地域全体のリンガ・フランカとしても機能するようになった。また、アブラ州やパンガシナン州のイロカノ語母語話者には、民族的にはイトネグ人やパンガシナン人であるものも少なくない (Rubino 2005)。また、イロカノ人はアメリカ合衆国のカリフォルニア州やハワイ州にもコミュニティを形成している。

イロカノ語では、大きく二つの方言の存在が話者達に認識されており、それらはアルファベットで表記される 'e' の発音の違いで区別される—この表記は、イロコス・ノルテ州など北部地域においては [e] で発音され、ベンゲット州やラ・ウニオン州などの南部地域では [ɯ] で発音される。

イロカノ語の基本的な音節構造は CV(C) である。子音音素として /p, b, t, d, k, g, s, h, ts, l, r, w, j, m, n, ŋ, ʔ/ が、母音音素として /a, i, u, e/ が認められる。形態論は分析的・膠着的であり、従属部表示の特徴を有する。述語先行型の言語であり、VS/VAO が典型的な語順である。格表示パタンは、人称代名詞においては能格・絶対格タイプ (A vs. S/O) であり、それ以外であれば中立型表示 (neutral alignment) である。動詞範疇はアスペクト、動作主性、ヴォイスを含む。他のフィリピンタイプの言語 (Himmelmann 2005) と同様に、イロカノ語のヴォイス体系は意味論・形態論的に行為者態 (Actor voice)、対象態 (Patient voice)、場所態 (Locative voice)、移動物態 (Thematic voice)という 4 つの範疇に分類される。これらの名称は、各々の節において軸項 (pivot; Van Valin and LaPolla 1997) として機能する名詞句の意味役割に由来し、動詞は基本的に最低でも一つのヴォイス表示接辞を取らなくてはならない。これらの点について以下で例示する。

(1) 行為者態構文

N-ag-subli＝ak　iti　balay＝mi.

PFV-AV-return＝1SG.ABS　OBL　house＝1PL.EX.GEN

'I went back to our house.'

(2) 対象態構文

S＜in＞ubli-ø＝k　ti nakasaku a　bagas　iti　ruaŋan.

＜PFV＞return-PV＝1SG.GEN　C　sacked　LIG　rice　OBL　door

'I returned to take the sacked rice at the door.'

(3) 場所態構文

Subli-a＝k　ti isyu　ti panag-arisit

return-LV＝1SG.GEN　C　issue　C　NMLZ-decide

iti pili-en a kandidato.
OBL choose-PV LIG candidate
'I will go back to the issue about deciding the candidate.'

(4) 移動物焦点
In-subli＝k amin ŋa inted＝na kanyak.
PFV.TV-return＝1SG.GEN all LIG PFV.PV.give＝3SG.GEN 1SG.OBL
'I returned everything he gave to me.'

(1) から (4) の構文において、主要部動詞語根は全て *subli* である。しかし、それに付随するヴォイス接辞がそれぞれ異なり、それに従って軸項の意味役割も異なっている。(1) の行為者態構文では、行為者が軸項として絶対格表示されて実現している。一方それ以外の構文では、行為者は属格で表示され、非行為者 (undergoer) が軸項となる。なお各構文の統語的他動性については、行為者態が自動詞構文であり、他のものは他動詞構文である。また、完了アスペクトの場合、対象態接辞 *-en* はゼロで実現する。アスペクトに関しては、完了と未完了の対立が見られる。完了アスペクトは接中辞 *-in-* や *-imm-* 、接頭辞 *n-* によって表示される。未完了アスペクトは語幹初頭の CVC 重複によって表示される。

表 1. 動詞のアスペクト屈折

bare form	perfective	imperfective
ag-adal (AV-root) 'to study'	*n-ag-adal*	*ag-ad~adal*
kan-en (root-PV) 'to eat'	*k<in>nnan*	*kan~kan-en*

なお、アスペクト表示の有無は動詞述語の定形性と必ずしも対応するわけではなく、裸形 (bare form) は統語環境や語用論との関わりで様々な意味を表現しうる。例えば主節主要部として現れた場合、裸形は未来の事象や、命令や勧誘といったムードを表す (詳しくは Yamamoto 2016; Rubino 1997 などを参照)。

3. イデオフォンの定義

イデオフォンの定義については、以下に引用する Doke (1935) の意味的な特徴付けが強い影響力を持っている：

"A vivid representation of an idea in sound. A word, often onomatopoetic,

which describes a predicate, qualificative or adverb in respect to manner, colour, sound, smell, action, state or intensity (1935: 118).”

しかしながら、この定義には様々な問題があることが指摘されている (Dingemanse 2011; Samarin 1971; Kunene 1978)。第一に、この定義はバントゥ諸語に特徴的に見られる特定の範疇を指すためのものであり、それ以外の言語に適応されることを意図したものではなかった。また、“manner, colour…” といった意味領域の列挙が網羅的なのか、それとも例示に過ぎないのかという点も明瞭でなく、イデオフォンが持つ形式的特徴や類像性などの特性も考慮されていない。

こうした問題を踏まえ、Dingemanse (2011) は通言語的に適応可能な定義として “marked words that depict sensory imagery” (2011: 25) というものを提案している。ここでの「有標」は、形態、音韻、あるいは統語など何らかの点でイデオフォンが他の語類と異なるということを意味する[1]。また、イデオフォンは「語（根）」であるとされる。つまり、ある特定のコミュニティにおいて慣用化された記号である。そして、イデオフォンは「描写的 (depictive)」であるとされる。これは、「記述的 (descriptive)」に対立する概念であり (Clark & Gerrig (1990) の demonstrating)、記号論における icon (Peirce 1932: 143) に相当する。描写性は、記号と意味の類像的写像関係や、音韻的・形態的表出性（特別なピッチなどによる前景化）、意味におけるイメージ性 (Diffloth 1979; Kita 1997) などによって特徴付けされるものである。そして最後に、イデオフォンは身体的な感覚や外界の知覚 (sensory imagery) を描写するものとされる (Kita 1997 なども参照)。本稿では、作業仮説として Dingemanse の定義を採用し、分析を行う。

4. イデオフォンの類型論的特徴

近年、類型論あるいは比較言語学的観点からの研究成果により、各言語に共通するイデオフォンの特徴が明らかになってきた (Childs 1994; Voeltz and Kilian-Hatz 2001; Ibarretxe under review; Samarin 1971; Kulemeka 1994)。以下は、そのうちのいくつかを纏めたものである。本研究ではこれらの特徴を考慮しながら、イロカノ語のイデオフォンの特徴を記述する。

[1] Dingemanse はこの有標性が Haspelmath (2006) の”markedness as overt coding”に近いものと述べている (2011: 26)。しかし、この点は必ずしもイデオフォンに当てはまる訳ではないとしており、どういった類いの有標性であるかは特定していない。

表 2. イデオフォンの類型論的特徴

	類型論的特徴	例（言語（語族）、参照文献）
音声学／音韻論	当該言語の音体系に合致しない特異音	無声歯茎停止音＋両唇ふるえ音 [t͡ʙ] (Karo (Tupian), Gabas & van der Auwera 2004)
	音素配列論の制約違反	語末の軟口蓋鼻音の重子音化 (Alto Perené (Arawak), Mihas 2012)
	ポーズ	Semai (Aslian, Austroasiatic), Diffloth 1972; Siwu (Kwa, Niger-Congo), Dingemanse in press
	象徴素 (phonaestheme)	軟口蓋鼻音と、鼻や口に関わる意味領域の繋がり (Austronesian, Blust 2003)
形態論／統語論	特有の形態表示	接尾辞*-ri*、*-ɴ* (日本語 (Japonic), Hamano 1998); 専用の副詞派生形態素 *-a(n)dala* (Numbami (Austronesian), Bradshaw 2006)
	形態論的プロセスの欠如	“[Ideophones] do not receive any inflectional marker and do not participate in any derivational processes characteristic of verbs, nouns, and adjectives” (Karo (Tupian), Gabas & van der Auwera 2004)
	繰り返し（部分／全体重複、3 重複、反復）	*fil-fil-fil* ‘fall down in circles and slowly’ (Basque (Isolate), Ibarretxe under review); *gelegele-gelegelegelegelegele* ‘shiny’ (Siwu (Niger-Congo), Dingemanse 2011)
	統語範疇	独立の語クラス (Cantonese (Sino-Tibetan); Dagacre (Niger-Congo), Bodomo 2006); 副詞や形容詞の下位範疇 (Tera (Chadic), Newman 1968)
	統語的独立性	‘Aloofness’ (Southern Sotho (Niger-Congo), Kunene 2001)
	‘say/make/do’などの動詞との共起	Karo (Tupian) Gabas & van der Auwera 2004; Upper Necaxa Totonac (Totonac-Tepehua), Beck 2008
	引用辞や補文標識による導入	日本語 (Japonic) Toratani 2006; Alto Perené (Arawak), Mihas 2012

意味論	特定性の高い意味	*sorkimorki* ‘sew clumsliy’ (Basque (isolate), Ibarretxe under review); *tanntann* ‘person walking loudly overhead’ (Upper Necaxa Totonac (Totonac-Tepehua), Beck 2008)
	五感に関わる意味	*ざらざら*（触覚）（日本語（Japonic) Akita 2010a）; *ghɒːp* ‘acrid, very intense’（嗅覚）(Semai (Austroasiatic) Tufvesson 2011); *mɛ̃rɛ̃mɛ̃rɛ̃ɛ* ‘sweet; umami’（味覚）(Siwu (Niger-Congo), Dingemanse 2011)
	否定の不可能性	Bit (Mon-Khmer, Austroasiatic), Badenoch 2016

5. イロカノ語のイデオフォン

本研究で扱うデータには、筆者が 2016 年 3 月及び 6 月にイロコス・ノルテ州ラワグ市において行った調査により収集したもの、イロカノ語の記事やテクストから得たもの、Rubino (2001) にリストされているものが含まれる。現地でのフィールドワークにおいては、Tufvesson (2007) の音声クリップによるタスクを使用してエリシテーションを行い、並行して面談調査も行った。これらの調査の結果、現在までに収集したイデオフォンのタイプ数は 231 である。

5.1 音声学・音韻論

イロカノ語の音韻的特徴として、第一に音節数の多さを上げることができる。次の表 3 は、イデオフォンと典型的な一般語彙の差異を例示するものである。一般語根の多くが 1 から 3 音節で構成されるのとは対照的に、イデオフォンには 4 音節もしくは 5 音節の長さを持つものが見られる。231 のイデオフォンと 493 の一般語根の音節数に関して、不等分散を仮定した 2 標本 t 検定を行った結果、両者には統計学的に有意な差があることが明らかとなった（$t\,(306) = 8.8471,\ p < .0001$）。

表 3. イデオフォンと非イデオフォン語根

verb		**noun**		**ideophone**	
saŋ.pet	‘to arrive’	*luː.gan*	‘vehicle’	*sap.sap*	‘to eat voraciously’
tin.nag	‘to fall’	*kan.ni.gid*	‘left’	*ŋa.ras.ŋas*	‘crunchy sound’
sar.nu	‘to follow’	*da.mag*	‘news’	*ʔa.ra.sa.ʔas*	‘to whisper’
pan	‘to go’	*pig.sa*	‘power’	*ʔa.ri.mu.kaː.muk*	‘slight drizzle’

頻繁に言及されるイデオフォンの特徴として、その他の一般語根には見られない音が生起するということが挙げられる。イロカノ語においてそうした現象はあまり見られず、語根の最終音節における長母音の生起が唯一の例外と言える。イロカノ語の非イデオフォンの最終音節においてそのような長母音が現れることはない。以下の図 2 のスペクトログラムにおいて、非イデオフォンである *bapur* の最終音節母音は 0.131555 秒の長さであることがわかる。一方図 3 では、イデオフォンの *indisuːr* の最終音節母音が 0.249098 秒の長さを持つ。

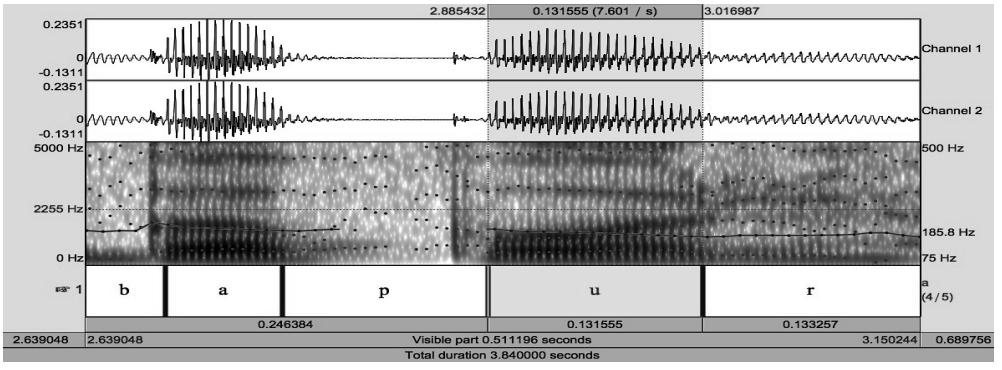

図 2. *bapur* の波形とスペクトログラム

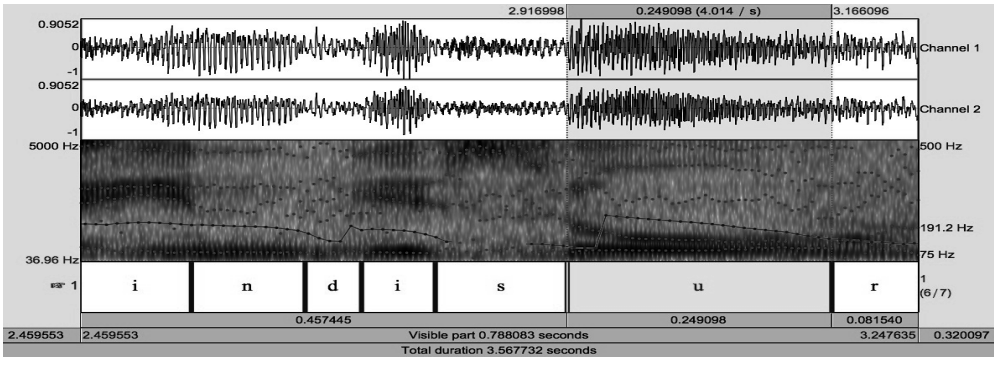

図 3. *indisuːr* の波形とスペクトログラム

また、イロカノ語では、語頭に軟口蓋鼻音を持つイデオフォンが高い頻度で鼻や口に関わる意味領域と関連する。以下の表 4 では、イロカノ語の例に加えて、同じくオーストロネシア語族に属するアミ語（東フォルモーサン）とセブアノ語（西マラヨ・ポリネシア語派、中央フィリピン）の例も列挙している。以下の表からわかるように、当該特徴を有する語彙自体は、そのほとんどが単一の言語もしくは低いレベルのサブ

グループに特有のものであるが、この音と意味の対応パタンはオーストロネシア言語の間で広く共有されている (Blust 2003)。

表 4. イロカノ語、アミ語、セブアノ語の象徴素 *ŋ-* を持つ語
（アミ語、セブアノ語のデータは Blust (2003) の引用より）

Ilocano	Amis	Cebuano
ŋalŋal ‘to chew’	*ŋaŋal* ‘ulcerated mouth from chewing betel nut’	*ŋaab* ‘to cry loudly’
ŋarasŋas ‘crunchy sound’	*ŋaliwŋiw* ‘complain, murmur, gripe’	*ŋaŋa* ‘stuttering’
ŋaretŋet ‘to gnash’	*ŋafŋaf* ‘eat grass as a cow does’	*ŋawŋaw* ‘to cry loudly, as a hungry child’
ŋesŋes ‘stuffy nose’	*ŋisŋis* ‘beard’	*ŋaŋa* ‘stuttering’
ŋuŋu ‘to speak nasally’	*ŋitŋit* ‘gnaw on bones or wood’	*ŋuhu* ‘talking through the nose’
ŋutŋut ‘to gnaw’	*ŋohŋoh* ‘to smooch, kiss’	*ŋu:lub* ‘to growl’
ŋemŋem ‘to mumble when irritated’	*ŋosŋos* ‘to eat raw food’	*ŋi:si* ‘to grin’
ŋalawŋaw ‘talkative’		
ŋubŋub ‘to eat ravenously’		

5.2 形態論

イデオフォンには様々な形式が見られる。以下の表 5 は、その中でもイロカノ語のイデオフォンにおいて基本的な形式を示したものである。現在収集されたイデオフォンのうち、47%が重複形式を含む（全体重複 32%；部分重複 15%）。具体的な重複形として、$C_1V_1C_2C_1V_1C_2$ 型（例：werwer, ‘sound of the sewing machine’）；$C_1V_1C_2V_2C_3C_2V_2C_3$ 型（例：kutengteng, ‘sound of a guitar’）；＜aR＞（R は l, r, n, y のいずれか）の音形を持つ C_1＜aR＞V_1C_2(V)$C_1V_1C_2$ 型（例：garakgak, ‘loud laughter’）；語頭の CVC を重複させた $C_1V_1.C_2V_2$:.$C_1V_1C_2$ 型（例：widawid ‘hand swaying while walking’）などが存在する。厳密には、これらの重複は形態論的プロセスを経ておらず、語根に固有のものである (INHERENT REPETITION, Dingemanse 2011: 138)。従って、*wer や *kuteng といった形式は独立形式としては存在しない。なお、表 5 のスモー

ルキャピタルは 1 音節を表す。重複形式は種類が多いようにも見えるが、2 の A.B.A.B タイプを除けば、1 の CVC.CVC のタイプを基本として、それに母音挿入や ＜aR＞[2] を組み合わせた形式が多数を占める。この点を踏まえると、イロカノ語のイデオフォンには鋳型と言えるような典型的な形式が存在することがわかる。

表 5. イデオフォンの基本的形式

		form	examples
reduplicated	1	A.A (CVC.CVC)	*ʔalʔal* ‘to pant’, *wagwag* ‘to shake mat’
	2	A.B.A.B (CV.CVC.CV.CVC)	*kiraskiras* ‘to scrape’, *tiwedtiwed* ‘to lose balance’
	3	A.B＋aR (C＜a.R＞VC.CVC)	*barutbut* ‘to fart freq.’, *ngaretnget* ‘to gnash’
	4	A.B.B (CV.CVC.CVC)	*kuyegyeg* ‘to tremble’, *kutengteng*, ‘sound of a guitar’
	5	A.B.B＋aR (C＜a.R＞V.CVC.CVC)	*ʔarinebneb* ‘to plunge in water’
	6	Initial-CVC RDP (CV.CV:.CVC)	*gusuːgus* ‘to rub’, *kabukab* ‘to grit the teeth’
simplex	7	A.B (CV(C).CV(C))	*dipur* ‘to crumble’, *sayyo* ‘to splash’
	8	A.B.C (CV(C).CV.CVC)	*suyaʔab* ’yawn’, *taguʔub* ‘howl of a dog’

イデオフォンに特有の形態的特徴は他にもある。イロカノ語では、一般動詞語幹が初頭の CVC の重複によって未完了アスペクトを表すが、いくつかのイデオフォンでは、第 2 音節の母音の重複によって継続性を表すという独特の形態操作が見られる。

(5) bisi～it
bisit～RDP
IDPH.crack～RDP
‘to crack repeatedly’

(6) rissu～ud
risud～RDP
IDPH.crumble～RDP
‘to crumble’

さらに、以下の例に見られる接頭辞 *kana-* も、イデオフォンのみに付加される名詞化接頭辞である。

[2] ＜aR＞ のうち、*-al-, -ar-, -ay-* は生産性を持たず、意味の特定もできないため単独の形態素と考えることはできない。一方、*-an-* は以下の例のように、一般の動詞語根やこの要素を元々持たないイデオフォンに付加され、継続性を表す (Rubino 2001: 310-311)。
i. *s＜an＞au* ‘to speak vociferously and continually’ (＜ *sau* ‘to speak’)
ii. *t＜an＞aul* ‘to bark repeatedly’ (＜ *taul* ‘to bark’)

(7) kana-rsibok
NMLZ-IDPH.splash
'continuous splashing'

(8) kana-rsiik
NMLZ-IDPH.spark
'continuous sparking'

5.3 統語論

イロカノ語のイデオフォンは、節中において複数の機能を果たしうる。第一に、(9) と (10) の例文が示すように、イデオフォンは名詞句の主要部に実現し、述語の項として機能する。この構造では、イデオフォンは一般の名詞と同じく格表示を受ける。

(9) N-ag-sardeng ti **gurruʔud**, ken ti kimat.
PFV-AV-stop C IDPH.rumbling.of.thunder and C lightning
'The rumbling of thunder and the lightning stopped.'

(10) Ma-ngngeg-ø=mo ti **karasakas** dagiti bulong,
PTV-hear=2SG.GEN-PV C IDPH.rustling PL.C leaf
ti **parsiak** ti danum nga ag-ay~ayus kadagiti bato.
C IDPH.splashing.over C water LIG AV-flow PL.OBL stone
'You hear leaves rustling and water splashing onto stones.'

イデオフォンは名詞句の主要部として機能するだけでなく、述部の主要部としても機能する。以下の (11) から (14) の例において、イデオフォンは一般動詞と同様のヴォイス接辞を付加されている。このとき、軽動詞といった要素が共に現れることはない。

(11) **Na-paddek-an**=na diay saka=k.
PTV-IDPH.stamp-LV=3SG.GEN DIS.C foot=1SG.GEN
'S/he stamped on my foot.'

(12) **N-ag-paraspas** ø iti ruʔut ken n-ag-pasayak.
PFV-AV-IDPH.cut.grass 3SG.ABS OBL grass and PFV-AV-irrigate
'S/he cut the grass and irrigated.'

(13) **Na-sayyasayya-ø** ti agduapulu a pagtaengan a
PFV.PTV-IDPH.sway-PV C twenty LIG house LIG
na-bangon-ø iti tabla ken kawayan.
PFV.PTV-build-PV OBL board and bamboo
'Twenty houses built with boards and bamboos were swayed.'

(14) **K＜um＞iraskiras** ti conveyor iti nabatu a kalsada.
＜AV＞IDPH.rumble C conveyor OBL rocky LIG road
'A conveyor rumbles along the rocky road.'

イデオフォンの他動性に関しては、多くのものが自動詞的な状況を描写するという点を指摘できる。例 (15) の *kilugkilug* は、何らかの原因によって音が発生していることを含意するが、その動作者は統語的には実現せず、自動詞的な状況として描写する。

(15) **Ag-kilugkilug** dagidiay plato.
AV-IDPH.clink DIS.PL.C plate
'Plates are clinking.'

使役的・他動的状況を表すには、使役接頭辞 *pa-* が付加される。次の例 (16) では、元々は自動詞的な状況を表すイデオフォンが接頭辞 *pa-* により他動詞的な状況を描写している。

(16) **P＜in＞a-lbaag-ø**＝na ti ridaw.
＜PFV＞CAUS-IDPH.slam-PV＝3SG.GEN C door
'S/he slammed the door.'

さらに、イデオフォンは複雑述語構文にも現れうる。以下の複雑な移動事象を描写する構文において、イデオフォンは移動様態の意味を表している。

(17) **Ag-tiwedtiwed** isuna nga imm-uneg idiay kuartu.
AV-IDPH.sway 3SG.ABS LIG PFV.AV-enter DIS.OBL room
'S/he swayed into the room.'

この構文に現れる二つの述語は両方が定形であり、事象統合の類型論 (Talmy 2000; Slobin 2004 など) における等価枠付け型 (equipollently-framed) の構文にあたる。

ここまで、イデオフォンが他の品詞と同様の分布パタンを持つことを見てきた。しかし、述語として機能するイデオフォンは、一般動詞と違う特徴も複数有する。第一に、一般動詞とは異なり、イデオフォンはヴォイス接辞などの形態論的過程を経ずに述語として機能する場合がある。

(18) **Burrek** ti danum.
IDPH.bubble C water
'Water bubbles.'

(19) **Taradtedted** ti tudu.
IDPH.drip C water
'Rain drips.'

第二に、イデオフォン述語は否定のスコープ内に実現できない。節や節要素を否定するために使用されるのは、文頭に現れる否定副詞 *haan/saan* であるが、イデオフォン述語と共起した場合、意味的に不自然なものと判断される。

(20) ??Haan isuna nga **ag-guddagudday**.
NEG 3SG.ABS LIG AV-IDPH.sway
Intended for 'S/he is not swaying.'

第三に、イデオフォンにはアスペクト屈折を制限されるものが見られる。例 (18) や (19) のヴォイス接辞を持たないものに加え、次の例が示すように ABAB 型のイデオフォンはいかなるアスペクト屈折も許されない。

(21) ***K<imm>iraskiras** ti conveyor iti nabatu a kalsada.
<PFV.AV>IDPH.rumble C conveyor OBL rocky LIG road
Intended for 'A conveyor rumbled along the rocky road.'

cf. (14) **K<um>iraskiras** ti conveyor iti nabatu a kalsada.
<AV>IDPH.rumble C conveyor OBL rocky LIG road
'A conveyor rumbles along the rocky road.'

4 節で触れたように、イデオフォンが単独の品詞範疇を形成するのか、あるいは他の主要な品詞の下位範疇に属するのかという問題は先行研究で盛んに論じられてきた。これまで見てきたように、イロカノ語のイデオフォンは一般の名詞や動詞と類似した振る舞いを見せる。しかしながら、形態論的制限や否定の不可能性など、イロカノ語のイデオフォンに特有の性質も見られる。このことから、イロカノ語においてイデオフォンは他の品詞範疇と部分的な重なりを有する、単独の範疇に位置づけられると言える。

5.4 意味論とイデオフォンの機能

5.4.1 イデオフォンの意味範囲

以下の表 6 は、イロカノ語のイデオフォンがカバーする意味範囲を示す。本分類は Mihas (2012) を参考にしている。他言語と同様に、イロカノ語のイデオフォンは人間の感性が関わる意味領域で見られ、特定性の高い意味を表現する[3]。現在のところ、自然音や打撃音、日常的な生理現象、また移動などの行為に関わるイデオフォンが豊富に発見されている。その一方、心理状態などの状態性を表すものは発見例が少ない。また、嗅覚や味覚に関わるイデオフォンは未発見である。

表 6. イデオフォンの意味範囲

Semantic domain	Example
	SOUNDS
ANIMAL AND BIRD SOUNDS:	*gakgak* ‘croaking’; *pakpak* ‘clapping’; *sayengseng* ‘buzzing sound’; *tuttut* ‘cry of rats’; *ʔungik* ‘shrill cry of pigs’; *gikgik* ‘cry of the *gikgik* bird’; *kayabkab* ‘fluttering’
NATURE SOUNDS:	*bayakaːbak* ‘heavy rain’; *danarruːdur* ‘sound of an engine’; *karasaːkas* ‘leaves rustling’; *benerber* ‘strong wind’; *barasiːbis* ‘drizzle’; *ʔanasaʔas* ‘soft blow’
HUMAN SOUNDS:	*ʔarasaʔas* ‘whispering’; *kutengteng* ‘sound of guitar’; *nguːngu* ‘speaking nasally’; *nguynguy* ‘whimpering’ *sagawsiw* ‘whistling’
LIGHT, FIRE:	*rissik* ‘sparking’; *rissit* ‘burning flesh, intense heat’; *saretset* ‘sizzling’
	ACTION
MOVEMENT:	*arduk* ‘moving stealthily’; *darusuːdus* ‘pushing one's way through hurriedly’; *guayungguayung* ‘bridge swaying’; *kisiːkis* ‘whirling’; *sanerser* ‘ascending kite’; *diwengdiweng* ‘swaying’; *banesbes* ‘darting’
CONTACT:	*gisiːgis* ‘brushing teeth’; *gusuːgus* ‘rubbing’; *kudkud* ‘scratching’

[3] 意味の特定性をいかに客観的に測定するかという問題に対しては、有効な解決策が今のところ存在しないと思われる。従って、意味に対するこの言及は著者の直観に依るものであり、測定法に関しては今後の課題としたい。

FALLING:	*ʔarinebneb* ‘plunging in water’; *bisuk* ‘splashing into water’; *garangugung* ‘falling into a deep place’; *sayyu* ‘splashing’; *rissiːbak* ‘falling rock’
HITTING:	*banetbet* ‘continuous whipping’; *kalangiːking* ‘jingling coin’; *kanukkuk* ‘sound produced by continuously hitting something hollow’; *kurʔit* ‘striking a match’; *lipak* ‘slapping’; *tugtug* ‘bumping one’s head’; *tuktuk* ‘knocking on something hard’;
PENETRATION:	*saksak* ‘stabbing’
DEFORMATION:	*begbeg* ‘pestling and mortaring’; *bisit* ‘cracking’; *dipag* ‘crumbling’; *dipak* ‘cracking’; *litak* ‘splitting a dried bamboo’; *ritrit* ‘tearing’
OPENING AND CLOSING:	*barasbas* ‘skimming over while reading’; *ʔibang* ‘banging’; *libag* ‘slamming a door’
APPEARANCE AND DISAPPEARANCE:	*kudrep* ‘dim’
HUMAN BODY FUNCTIONS:	*ʔareb ʔeb* ‘burp’; *ʔalʔal* ‘pant’; *baʔeng* ‘sneeze’; *bariwengweng* ‘snuffle’; *barutbut* ‘fart’; *garakgak* ‘loud laughter’; *kanarkar* ‘raspy voice due to colds’; *karabakab* ‘stomach rambling’; *ʔuyek* ‘cough’; *ʔiker* ‘whooping cough’; *bangʔes* ‘snort’
HUMAN ACTIVITIES:	*ngaretnget* ‘gnash’; *parsiak* ‘splashing over’; *sapsap* ‘voracious eating’; *tarattat* ‘typing’; *wagwag* ‘shaking blanket’; *werwer* ‘the sound of sewing machine’; *widawid* ‘hand swaying while walking’; *ʔarikawkaw* ‘shaking something’; *kabuːkab* ‘gritting teeth’; *paraspas* ‘cutting the grass’; *ʔarubʔub* ‘sipping’;
STATES	
PHYSICAL APPEARANCE:	*kuyemyem* ‘raincloud’; *buritektek* ‘varigated’
PHYSICAL FEELINGS:	*karikkik* ‘tickle’; *kutur* ‘shiver’

5.4.2 文法的統合度と表出性

通言語的に、イデオフォンは形態・統語的繰り返し、特別なイントネーションや音声特徴（例：きしみ声、息もれ声）によって前景化される傾向が強く、こうした性質

は「表出性 (Expressiveness)」という概念で捉えられる (Diffloth 1979; Klamer 1999; Dingemanse 2015 など)。また、「文法的統合度 (the degree of grammatical integration)」はイデオフォンの統語的実現位置に関わるもので、文の周縁部や付加詞などの随意的な統語位置で現れたものは統合度が低く、節の主要部やその項として実現したものは文法的に深く統合されていると言える (Lehmann 1988 も参照)。通言語的に、イデオフォンの文法的統合度は低く、文の周縁部や文法的に省略可能な位置に実現するのが典型的とされる (Dingemanse & Akita in press)。このイデオフォンの表出性の高さと文法的統合度の間には、逆の相関があるということが指摘されている (Dingemanse & Akita in press; Dingemanse in press)。つまり、文法的統合度が高い場合、イデオフォンの表出性は低く、またその反対に、文法的統合度が低い場合、表出性が高くなるということを意味する。

5.3 で見たように、イロカノ語のイデオフォンは述語やその項など、節の主要な構成要素として機能する。言い換えると、それらは文法的に深く統合されていると言える。このことから予想されるのが、イロカノ語のイデオフォンの表出性は低いだろうということである。事実、実際の反復的な事象を、類像的な形態操作により描写することは許されない。

(22) ***Tedted~tedted** ti danum.
IDPH.drip~RDP C water
Intended for 'Water drips repeatedly.'

また図 4 が示すように、イデオフォンが発せられる際、特別なピッチなどによる前景化も見られない。区切りの前半部分がイデオフォン *pinagsayyu* 'to splash' である。

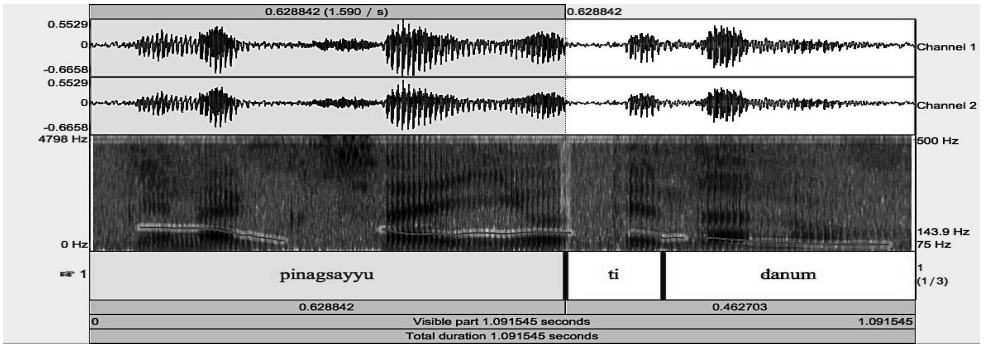

図 4. ***Pinagsayyu** ti danum* のピッチ輪郭

表出性は、Dingemanse (2011) の定義の一部を構成する「描写性」に貢献する要素として捉えられており、イデオフォンの鮮明で類像的（実演的）な事態描写において効果を発揮する (2011: 34-41)。しかしながら、上記の議論からわかるように、イロカノ語のイデオフォンが持ちうる描写性はこれまで報告されている言語のものと比べて低い。そのため本研究が提示するデータは、イデオフォンの重要な機能とされる描写性の度合いは各言語において一様ではなく、程度問題であるということを示唆する。

描写性の他にイデオフォンがどのような機能を持つかという点に関しては、あまり明らかになっていない。そこで次の 5.4.3 では、イロカノ語のイデオフォンが証拠性を示す機能を担っていることを指摘する。

5.4.3　イデオフォンと証拠性

証拠性とは、発話に含まれる情報がどのようにして得られたかを示す文法表現を指すものであり (Aikhenvald 2015)、イロカノ語においては伝聞を示す要素 *kanu* が存在する。

(23)　Im-parit　**kanu**　ni　Grace　nga
PFV.TV-forbid　EVID　P.C　Grace　LIG
um-uneg　ni Tatang　idiay　kuartu＝na.
AV-enter　P.C father　DIS.OBL　room＝3SG.GEN
‘They said that Grace forbade his father to enter her room.’

一方イデオフォンは、(15) のように、自身が表す事象を話者が直接知覚したことを意味する。

(15)　**Ag-kilugkilug**　dagidiay　plato.
AV-IDPH.clink　DIS.PL.C　plate
‘(I heard that) plates are clinking.’

注意すべきことは、イデオフォンが意味する証拠性は会話の含意ではなくコード化されているという点である。(24) の例が示すように、証拠性の意味はキャンセルすることができない。

(24)　*Ag-kilug~kilug　digidiay　plato
AV-IDPH.clink　PL.C　plate

ngem haan＝ku a na-ngngeg-ø.
but NEG＝1SG.GEN LIG PTV.PFV-hear-PV
Intended for ‘Plates clinked but I did not hear the sound.’

まとめると、イロカノ語は、文法的表現としては間接的な証拠性を表す要素しか持たないが、イデオフォンという文法化していない語根が、直接的な証拠性を表す要素として機能していると言える。

6. 結語

本研究は、イロカノ語のイデオフォンのさまざまな言語学的特徴を類型論的な観点から記述、分析することを試みた。音韻論的には、非イデオフォン語根では許容されない最終音節における長母音の生起が見られ、音節数も非イデオフォン語根と比べて多い傾向にあるということが明らかになった。形態論的には、イデオフォンの約半数に固有的・非派生的な重複が見られ、他にもイデオフォンにのみ付加される接辞の存在が明らかとなった。こうした特性は通言語的に見られるものであり (Childs 1994; Akita 2009; Mihas 2012)、イロカノ語のイデオフォンが、音韻的・形態的に有標であることが明らかとなった。

一方、統語的には、イデオフォンは述部あるいは名詞句の主要部として実現し、他の品詞範疇と複数の特徴を共有している。またその一方で、一般動詞に必須であるヴォイス接辞の付加を受けずとも述語として実現できるという点や、アスペクト屈折が許されないという点など、イデオフォンは一般動詞とは異なる性質も持ち合わせる。これらの事実から、イデオフォンは他の品詞と部分的な共通点を持つ単独の範疇であると結論づける。

意味論的には、他の言語に見られる傾向と類似して、人間の感性に関わる意味領域をカバーし、表現する意味は特定性が高いということがわかった。

通言語的に、イデオフォンは統語的周縁部において実現し、特別なピッチや類像的な形態法によって前景化される傾向が強い。これらを捉える「表出性」という概念は、Dingemanse (2011) の定義の一部である「描写性」に貢献する要素である (2011: 35)。本稿で提示したイロカノ語のデータは、イデオフォンが表現しうる表出性及び描写性の度合いは各々の言語において異なるということを示唆する。また、この機能的特性に関連して、イロカノ語のイデオフォンが直接的な証拠性を表現する役割を担うという点を指摘した。

略語

ABS-絶対格, AV-行為者焦点, C-中核項, CAUS-使役, DIS-遠称, EVID-証拠性, EX-排他, GEN-属格, IDPH-イデオフォン, LIG-リガチャー, LV-場所態, NEG-否定辞, NMLZ-名詞化接辞, OBL-斜格, P-固有名詞, PFV-完了, PL-複数, PTV-偶発・経験, PV-対象焦点, RDP-重複子, SG-単数, TV-移動物態, 1-一人称, 3-三人称, ＜＞-接中辞, “＝”-接語化, “～”-重複

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. 2015. Evidentials: their links with other grammatical categories. *Linguistic Typology* 19 (2): 239-277.

Akita, Kimi. 2009. A grammar of sound-symbolic words in Japanese: Theoretical approaches to iconic and lexical properties of mimetics. Ph.D. dissertation, Kobe University.

Akita, Kimi. 2010a. An embodied semantic analysis of mimetic psych-predicates in J apanese. *Linguistics* 48(6): 1195-1220.

Akita, Kimi. 2010b. A Bibliography of Sound-Symbolic Phenomena in languages other than Japanese. http://sites.google.com/site/akitambo/Home/biblio/bibb/

Badenoch, Nathan. 2016. Bit expressives. Presented at First Meeting of Expressives Kaken Group. 23-24 July. Kyoto, Japan.

Beck, David. 2008. Ideophones, Adverbs, and Predicate Qualification in Upper Necaxa Totonac. *International Journal of American Linguistics* 74 (1): 1-46.

Blust, Robert A. 2003. The phonestheme ŋ- in Austronesian languages. *Oceanic Linguistics* 42, 1: 187-212.

Bodomo, A. B. 2006. The structure of ideophones in African and Asian languages: The case of Dagaare and Cantonese. In J. Mugane et al. (eds.), *Selected proceedings of the 35th Annual Conference on African linguistics: African Languages and Linguistics in Broad Perspectives.* Somerville: 203-213. MA: Cascadilla.

Bradshaw, Joel. 2006. Grammatically marked ideophones in Numbami and Jabem. *Oceanic Linguistics* 45 (1): 53-63.

Childs, G. Tucker. 1994. African Ideophones. In Leanne Hinton, Johanna Nichols, and John J. Ohala (eds.), *Sound Symbolism*, 178-204. Cambridge: Cambridge University Press.

Clark, Herbert H. & Richard J. Gerrig. 1990. Quotations as Demonstrations. *Language*

66(4): 764-805.

Diffloth, Gérard. 1972. Notes on expressive meaning. *Chicago Linguistic Society* 8*:* 440-447.

Diffloth, Gérard. 1976. Expressives in Semai. In Philip N. Lenner, Laurence C. Thompson, and Stanley Starosta, (eds.), *Austroasiatic Studies, Part I,* 249-264. Honolulu: The University of Hawaii Press.

Diffloth, Gérard. 1979. Expressive phonology and prosaic phonology in Mon-Khmer. In Theraphan L. Thongkham, Pranee Kullavanijaya, Vichin Panupong, and M. R. Kalaya Tingsabadh, (eds.), *Studies in Mon-Khmer Phonetics and Phonology in Honour of Eugenie J. A. Henderson,* 49-59. Bangkok: Chulalongkorn University Press.

Dingemanse, Mark. 2011. The meaning and use of ideophones in Siwu. Ph.D. dissertation, Max Planck Institute for Psycholinguistics, Nijmegen & Radboud University.

Dingemanse, Mark. 2012. Advances in the cross-linguistic study of ideophones. *Language and Linguistics Compass* 6(10): 654-672. doi:10.1002/lnc3.361.

Dingemanse, Mark. 2015. Ideophones and reduplication: Depiction, description, and the interpretation of repeated talk in discourse. *Studies in Language* 39(4): 946-970. doi:10.1075/sl.39.4.05din.

Dingemanse, Mark. in press. Expressiveness and system integration: On the typology of ideophones, with special reference to Siwu. *STUF-Language Typology and Universals*.

Dingemanse, Mark & Kimi Akita. in press. An inverse relation between expressiveness and grammatical integration: on the morphosyntactic typology of ideophones, with special reference to Japanese. *Journal of Linguistics.*

Doke, Clement Martyn. 1935. *Bantu linguistic terminology*. London: Longmans, Green.

Gabas, Nilson., Jr & Johan van der Auwera. 2004. Ideophones in Karo. In Michel Achard & Suzanne Kemmer (eds.), *Language, culture and mind*, 397-413. Stanford: CSLI Publications.

Hamano, Shoko Saito. 1998. *The Sound-Symbolic System of Japanese.* Stanford: CSLI.

Haspelmath, Martin. 2006. Against markedness (and what to replace it with). *Journal of Linguistics* 42 (01): 25-70. doi:10.1017/S0022226705003683.

Haspelmath, Martin. 2011. The indeterminacy of word segmentation and the nature of morphology and syntax. *Folia Linguistica* 45 (1): 31-80.

doi:10.1515/flin.2011.002.

Himmelmann, Nikolaus P. 2005. The Austronesian languages of Asia and Madagascar: typological characteristics. In K. Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelmann (eds.), *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*, 110-181. London & New York: Routledge.

Hinton, Leanne, Johanna Nichols, and John J. Ohala (eds.). 1994. Sound Symbolism. Cambridge: Cambridge University Press.

Ibarretxe Antuñano, Iraide. under review. Basque ideophones from a typological perspective view.

Kita, Sotaro. 1997. Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics. *Linguistics* 35.2: 379-415.

Klamer, Marian. 1999. Austronesian Expressives and the Lexicon. *Toronto Working Papers in Linguistics* 16 (2): 201-219.

Kulemeka, Andrew Tilimbe. 1994. The Status of the Ideophone in Chichewa. PhD dissertation, Indiana University.

Kunene, Daniel P. 1978. The ideophone in Southern Sotho. Berlin: Dietrich Reimer.

Kunene, Daniel P. 2001. Speaking the Act: The Ideophone as a Linguistic Rebel. In F. K. Erhard Voeltz & Christa Kilian-Hatz (eds.), 183-191. Amsterdam: John Benjamins.

Lehmann, Christian. 1988. Towards a typology of clause linkage. In Haiman and Thompson (eds.), *Clause Combining in Grammar and Discourse*, 181-225. Amsterdam: John Benjamins.

Mihas, Elena. 2012. Ideophones in Alto Perene (Arawak) from Eastern Peru. *Studies in Language* 36(2): 300-344. doi:10.1075/sl.36.2.04mih.

Newman, Paul. 1968. Ideophones from a syntactic point of view. *Journal of West African Languages* 5: 107-117.

Peirce, Charles Sanders. 1932. *Collected papers of Charles Sanders Peirce, vol. 2: Elements of logic*. Charles Hartshorne and Paul Weiss (eds.). Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press.

Reid, Lawrence A. 1989. Arta, another Philippine Negrito language. *Oceanic Linguistics* 28(1): 47-74.

Rubino, Carl. 1997. Ilocano Reference Grammar. PhD dissertation, University of California Santa Barbara.

Rubino, Carl. 2001. Iconic morphology and word formation in Ilocano. In Friedrich K.

Erhard Voeltz and Christa Kilian-Hatz (eds.), 303-320. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Rubino, Carl. 2005. Iloko. In Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelmann (eds.), *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 326-49. London & New York: Routledge.

Samarin, William. 1971. Survey of Bantu ideophones. *African Language Studies* 12: 130-168.

Slobin, Dan I. 2004. The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In S. Strömqvist & L. Verhoeven (eds.), *Relating events in narrative: Vol. 2. Typological and contextual perspectives,* 219-257. Lawrence Erlbaum, Mahwah.

Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics, Vol. II: Typology and process in concept structuring.* Cambridge, MA: MIT Press.

Toratani, Kiyoko. 2006. On the optionality of to-marking on reduplicated mimetics in Japanese. In Timothy J. Vance & Kimberly Jones (eds.), *Japanese/Korean linguistics* vol. 14, 415-422. Stanford, CA: CSLI Publications.

Tufvesson, Sylvia. 2007. Expressives. In Asifa Majid (ed.), *Field Manual* Volume 10: 53-48. Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics. http://fieldmanuals.mpi.nl/volume/2007/expressive.

Tufvesson, Sylvia. 2011. Analogy-making in the Semai sensory world. *The Senses and Society* 6: 86-95. DOI: 10.2752/174589311X12893982233876.

Van Valin, Robert D., Jr. & Randy J. LaPolla. 1997. *Syntax: structure, meaning and function.* Cambridge: Cambridge University Press.

Voeltz, F. K. Erhard, and Christa Kilian-Hatz (eds.). 2001. *Ideophones*. Amsterdam: John Benjamins.

Yamamoto, Kyosuke. 2016. Finiteness of the neutral aspect form in Ilocano. Presented at The 26th annual meeting of the Southeast Asian Linguistic Society. 26-28 May, Manila, the Philippines.

Ideophones in Ilocano

Kyosuke Yamamoto

Abstract

This paper is a first attempt to survey ideophones in Ilocano, an Austronesian language of the Philippines. Ideophones are described as expressive marked linguistic units with a depictive function. Mainly based on field data, I describe and analyse the structure, meaning and function of Ilocano ideophones from a typological perspective. Although Ilocano ideophones show idiosyncratic phonological and morphological properties, they most often participate in sentential syntax as a nominal element or predicate, and the bulk of Ilocano ideophones may undergo morphological derivations characteristic of verbs. The study also shows that Ilocano ideophones rarely exhibit cross-linguistically recurrent expressive features, by which ideophones are set apart from the rest of the utterance as depictive words.

Key words: Austronesian, Ilocano, ideophones, linguistic typology

受領日　2016年10月7日
受理日　2016年11月28日